



大学図書館問題研究会 第 50 回全国大会のご案内

第 50 回全国大会は兵庫で開催いたします。

日 時：2019 年 8 月 31 日（土） ～ 9 月 2 日（月）

会 場：シーサイドホテル舞子ビラ
<https://www.maikovilla.co.jp/>

是非、お誘いあわせの上ご参加ください。

[目 次]

大学図書館問題研究会第 50 回全国大会のご案内	…	1
大図研京都ワンデイセミナー 米国図書館界の新潮流「エンベディッド・ライブラリアン」サービス参加報告 「外側」のライブラリアン	佐藤 知生	… 2
ワインとメタデータ	坂本 拓	… 4
会費ご納入のお願い	…	6

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：kyoto@daitoken.com（大学図書館問題研究会京都地域グループ）

URL：<http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

**大図研京都ワンデイセミナー
米国図書館界の新潮流「エンベディッド・ライブラリアン」サービス参加報告
「外側」のライブラリアン**

佐藤 知生

本稿では、2018年11月4日（日）に京都ノートルダム女子大学で開催された大図研京都ワンデイセミナー『米国図書館界の新潮流「エンベディッド・ライブラリアン」サービス』の参加報告をさせていただきます。

1. 参加動機

研究室時代の殆どを山と実験室で過ごしていた私が図書館業界に目を向けた理由のひとつに、サブジェクト・ライブラリアンの存在があります。図書館の図の字も知らない自分でしたが、研究に近い領域のサポートであれば役に立てるやもと考えたのです。仕事を始めて幾星霜、色々と厳しい現実も目の当たりにしましたが、主題支援の必要性はむしろ前より強く感じるようになりました。今回のワンデイセミナーで取り上げられた「エンベディッド・ライブラリアン」は、サブジェクト・ライブラリアンとの関連も深く以前から関心をもって動向を見ておりましたので、お知らせをいただいた時には「おお！」と思いました。海外の視察報告を聞く機会があっても、現役のエンベディッド・ライブラリアンの方から直接お話を聞ける機会はなかなかありません。自身の今後の指針にも参考になるかと、参加させていただくことにしました。

2. Program1-1

はるばる海外からお越しくくださったのは、アリゾナ大学のサンディー・クレイマー氏（ヘルスサイエンス図書館副館長）、ジェニファー・マーティン氏（同ライブラリアン）、マリオン・スラック氏（薬学部教授）のお三方。図書館の組織責任者、実務担当者、そしてエンベディッド・ライブラリアンサービスに欠かせない教員という豪華な布陣です。それぞれの立場から、このサービスへの関わりやその成果についてお話いただくことで、エンベディッド・ライブラリアンサービスを立体的に捉えることができたのは貴重な経験でした。

備忘録的で恐縮ですが、まずはお話を聞いて感じた日本との違いや共通点を次にまとめます。

【相違点】

1) 図書館員の多様性と身分

米国の図書館員全般に言えることですが、修めている学位が多様であること、教員と同じ身分を有していることは、やはり人的資源の部分で大きな違いだと思いました。

2) 露出度

教授会や大学組織の会合へ積極的に参加していることもそうですが、担当分野の学会にまで顔を出している日本の図書館員というのは寡聞にして存じません。

【共通点】

1) 利用者の変化

そもそもエンベディッド・ライブラリアンサービスを始めたきっかけというのが、利用者の減少だそうです。EJをはじめ電子媒体の情報源が普及したことで図書館から利

用者がいなくなるというのは、まさに我々の身の回りでも起こっていることではないでしょうか。

2) Trial&Error

たとえ人材が揃っていたとしても、たとえ予算が潤沢だったとしても、新たに生まれた課題に対して初めから答えを用意できるわけではありません。沢山の取り組みと失敗の繰り返しの中でひとつひとつ成果をあげてきたという話を聞き、最初に立たされている場所はそう離れていないのだと感じました。

来なくなった利用者と向き合うために図書館から出た図書館員は、ホームでない場所ではオフィスを持つことができなかつたそうです。だから、最初は物置から。しかし、物理的に人がいれば誰かの目に認識され、意識され、繋がるようです。ある日、「一緒にやってほしいことがある」と、薬学部長が扉を叩いたところから彼女たちはオフィスを持ち、エンベディッド・ライブラリアンサービスが本格的に始まります。マーティン氏が来たことで、システムティック・レビューやメタデータ管理ができる学生が増加したと、スラック氏は語っていました。今では査読やサイテーションマネジメントのサポートから投稿先の調査などもエンベディッド・ライブラリアンが担当しているようです。

この逸話から我々が学ぶべきことは何でしょうか。モチベーションかはたまたその先にある行動力か。しかし、そんな大層なものは一朝一夕で学べることはありません。私が学んだのは、図書館の「外側」に我々を必要としている人、我々が力になれる人がいるということです。今後ますます増えてくるであろうその「外側」の人たちとどう向き合っていくか。単に真似ごとではなく、私たちなりの答えをこれから模索していかなければならないのだと背筋が伸びる思いでした。

3. Programme1-2

このプログラムの後半では、本邦におけるエンベディッド・ライブラリアン研究の第一人者である鎌田均先生から最新の研究についてご報告いただきました。半構造型インタビューによる情報探索や図書館利用の実態調査から見えてきた概要を聞くに、ウェブ上のサービスが認知されにくい一方で、エンベディッド・ライブラリアンの存在は認知されていたとのことです。ウェブ上の膨大な情報に埋もれていくリスクを考えれば、まず最初にフェイス・トゥ・フェイスで情報を届けるというのはとても大切なことのように思えました。

4. Programme2

このプログラムでは、富山大学の金田氏から海外派遣事業で訪問した2大学の調査報告を伺いました。自分たちの情報リテラシー教育に物足りなさを感じて、米国流を知るためにコーネル大学とミシガン大学を訪問した金田氏。事例とともに事業継続のポイントについてリサーチした結果を2点お話いただきました。ポイントのひとつは、学内にある既存のプログラムに情報リテラシーのピースをはめ込むというもの。もうひとつは、シンプルに **Trial&Error!** (継続のポイントというより、継続はするものだというタフな意志が彼の国から伝わってきます)。ウルトラ C というほどの意外性はありませんが、こういったやるべきことを結果が出るまでやりとおすところが流石だと思いました。

5. 図書館員の進化論

鎌田先生の研究報告の中で今の図書館員が向き合うべき核心的な話があったように私は思います。それは、利用者に情報収集能力の欠如が自覚されていないということです。

掌にある小さな端末で必要な情報をすべて手に入れることができる。そう考えている人が果たして図書館に情報を探しに来るでしょうか。情報の探し方についてガイダンスを受けに来るでしょうか。答えはノーです。もう利用者は情報に飢えていませんし、図書館は情報のオアシスではありません。しかし、今度は情報の荒波に揉まれ、気づかぬうちに溺れかかったり、或いは進路を見失ったりしている利用者があるようです。その人たちにとって図書館員はどういう存在であるべきでしょう。そのひとつの解が、エンベディット・ライブラリアンなのかもしれません。少なくとも、学生はもちろん、教員やその他の大学構成員、学会との距離を縮めていくことがこれからの図書館員に求められる資質となる気がしております。

このセミナーに参加させていただいて、大変良い勉強をさせていただきました。登壇いただいたみなさまと企画・運営に携わられた大図研京都地域グループのみなさまにこの場を借りて御礼申し上げます。

さとう ともき (神戸大学附属図書館)

ワインとメタデータ

坂本 拓

1. はじめに

ワインは実は非常に歴史が古く、紀元前 6500 年頃には既に人類はワインを飲んでいたと言われていました。これは文字の使用とほぼ同じ頃です。ワインは、最初グルジア等のコーカサスで発明されましたが、その後、中東、ギリシャ、と回って南ヨーロッパに入り、ローマ帝国時代に、ヨーロッパ全体に広まりました。そして現在では、ヨーロッパだけではなく、アメリカ大陸、アフリカ大陸、オセアニア、中東、インド、日本と多くの国・地域でワインが作られています。そのため、様々な国のワインが様々な国の人に飲まれており、国を超えた流通が当たり前になっています。

そして多様な国のワインが在るために、ワイン初心者の人から「ワインのラベルはいろいろと書かれていて、どれが生産者でどれがブドウの名前かわからない」ということをよく聞きます。これはすなわち、1本のワインが、非常に多くの情報を持っており、それが整理されていないと、ワインを検索・同定することが難しいのではないかと、ということです。私は司書の資格とソムリエ（ワイン・エキスパート）の資格の両方持っていますが、しばしばワインの同定は図書の同定と同じくらい難しいと感じることがあります。以下に1本のワインが持っている一般的な情報を列挙していきたいと思えます。

- ・生産者（そのワインを作った責任者）
- ・ブドウの品種（そのワインの基になったブドウ。複数ブレンドされていることもあり）
- ・ビンテージ（そのブドウが結実した年。[収穫した年、と言われることも多いがこれは厳密には誤り]）
- ・ブドウが栽培された土地（国→地域→村→畑→区画というように、良いワインほど、狭いエリアで栽培されたブドウのみを使う）
- ・畑の等級（特級畑や一級畑など）
- ・ワインの色（白か赤かロゼか（最近はやりのオレンジか））
- ・ブドウを収穫した者（醸造者が自分で栽培したか、ブドウ農家から買い取ったものか）

- ・アルコール度数
- ・容量（一般的には 750ml だが、その何倍もの容量のワインもある）

上記が一般的な情報です。また国毎に法律があり、ワインのラベルにはどの場合にもこまごまの情報を書いて良いのかが決まっています。以上の情報がフランス語、イタリア語、ドイツ語、スペイン語、英語等で表記されていて結構ややこしいのですが、それでもワインへの愛があれば何とかできます。しかしここに、上記の条件は全て同じだけでも、熟成した樽ごとに個体差があるため、樽番号をワインに振っていたり、全く同じ条件で作ったワインだけでも、特別できの良いワインに色のついたキャップを付けていたりして、これらはなかなかややこしいです。

さらに、たまに生産者がワインに「固有の名称」をつけることがあるのですが、これがわかりにくい。例を挙げると、「ブドウ畑の前を走っている国道の番号」をワインに名付けたり、「最近生まれた孫娘の名前」や「わざわざフランス語読みにしたひい爺さんの名前」を名付けたりします。ここまでくると、もうカオスです。世界中を無数のワインが流通している中で、適切にワインを検索・同定するためには、上記のような情報を適切にメタデータに盛り込む必要があるのではないかと私は考えました。

2. ワインのデータベースとメタデータ

上記のような理由から、私はワインのメタデータに興味を持ちました。先行研究や参考になるものが無いかと調べましたが、簡単に検索した範囲では日本語・英語の文献は見つかりませんでした。そのため、現在用いられている主要なワインのデータベースに当たり、メタデータがどのようなになっているかを調べようと考えました。現在、国際的に使用されているワインの DB は、主に以下の 3 つがあります。

1. Wine-Searcher <https://www.wine-searcher.com/>
2. Vivino <https://www.vivino.com/>
3. Cellartracker <https://www.cellartracker.com/>

それぞれ、DB の特徴とメタデータについて見ていきます。1 番の "Wine-Searcher" ですが、これは世界中のワインショップが、自分の店のワインリストをここに登録できるようになっています。利用者がこの DB で検索すると、利用者が接続しているネットワークから国を自動で判別して、その国のワインショップのリストが表示されるようになっています。個人的にはとても便利なので愛用していますが、メタデータに関しては、全く規則性が見出せず、適当に作っているように思われます。ある程度ワインに精通した人でないと使いこなせない DB かもしれません。

次に 2 番の "Vivino" ですが、全世界に 3400 万人の利用者がいると言われる非常に人気のある DB です。特徴としては、利用者がワインのラベルの写真を撮って感想を投稿すると、DB 内のレコードと自動的にマッチングが行われ、投稿したコメントが該当するレコードにつく、というものです。Twitter 等の SNS とも連動して普及し、世界中のワイン愛好家が評価を共有できるようになっています。メタデータについては、一定の規則性が認められ、ワインのタイトル部分が、1.生産者 2.土地 3.ブドウ品種 4.その他特別に重要な情報、が連なって構成されていました。ただ、レコードによっては、2 と 3 が逆転しているものが、散見されました。また、レコードの詳細ページでは、①生産者、②ブドウ品種、③土地、④その土地の伝統的なスタイル、⑤そのワインと合う食事が掲載されていますが、③の粒度が、レコードによって「地域レベル」だったり「村レベル」だったりバラつきがありました。

そして 3 番の "Cellartracker"。これは一番シンプルな DB で、該当するワインのレコ

ードに、飲んだ人がコメントと点数をつけるというものです。メタデータにはかなり規則性が見られ、1.ビンテージ、2.生産者、3.ブドウ品種、4.土地、5.その他特別に重要な情報、となっていました。一部、3と4が逆転しているレコードも見られましたが、まずまずDB内でのレコードは統制されていると言えるのではないかと思います。

3. 考察

上記の3つのDB間で、スキーマと言えるようなメタデータの統一は全く見られませんでした。この理由を、以下、少し考察してみたいと思います。

ワインと図書、どちらも人類にとって重要な文化ですが、図書は一冊の本を何十年にもわたって、多くの人が、何度でも利用することができるため、「図書館」という、資料を共有するための施設があります。他方、ワインは一度誰かが飲むとそれで消費されてしまい、その後誰かが鑑賞することはできません。また、圧倒的大多数のワインは、保存期限の限界は10年以下であり、長期間保存・管理することに適しません。余談ですが、現存する最古のワインとして、南ドイツのシュパイヤー博物館に、約1700年熟成（西暦350年頃）のワインが保管されていたりします。（さらに余談ですが、このワインが19世紀に発掘された際、実際に専門家による試飲もされました。）

話がそれましたが、以上の理由から図書とワインでは、利用者との関係性が全く異なっており、ワインが検索されるケースは、購入のための検索が前提となっています。つまり上記のようなワインのDBは、互いに商業的に競合する存在であり、協力して共通のメタデータのスキーマを構築するという発想・必要性は生まれないでしょう。

4. おわりに

今回は簡単に調べただけですが、利用者と対象の関係が変わると、メタデータの在り方も大きく変わるのだ、ということに気づきました。また時間を見つけて、ワインのメタデータについては勉強したいと思います。

さかもと たく（京都大学附属図書館）

◇ 会費ご納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

2016/2017年度(2016年7月～2017年6月)より、大学図書館問題研究会会費は、すべての会員の皆さまに、直接大学図書館問題研究会事務局へご納入いただくこととなりました。

一括徴収方式に移行し、3年目となりますが、京都地域グループは年度継続の前に会費をご納入いただく前納があまり進んでいない状況でございます。ワンデイセミナーやグループ報は京都地域グループ費により開催・発行させていただいております。ご多忙のところ大変恐縮ですが、会費のご納入のほどよろしくお願いいたします。

会費は、¥7,000(大図研会費：¥5,000+京都地域グループ費：¥2,000)/年度です。

【振込先】

郵便局 00190-2-79769 大学図書館問題研究会

■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900 ■店番 019

■預金種目 当座 ■店名 〇一九(ゼロイチキューウ店) ■口座番号 0079769

ご不明な点は大学図書館問題研究会事務局(会費担当)(kaihi@daitoken.com)までご連絡ください。

※ 学生会員制度(試行)として、学生の方には特典をお渡ししております。

詳細は京都地域グループ Web サイトの「学生会員制度の試行について」をご覧ください。